

『可愛いペット』

柏原中学校三年 渋谷友莉菜

皆さんはペットを飼っていますか。また、飼ったことはありますか。私の家では、犬を飼っています。チワワという種類の犬で、名前はフランと言います。フランというのは、昔のフランスの通貨だと、思った方がいらっしやるかもしれませんが、チワワの原産地である、メキシコのお菓子の名前から、フランと名付けました。フランの好きな食べ物は、鳥のささみ肉のドッグフードで、片方の前足で猫のように顔を洗うしぐさが、とても可愛い愛犬です。私は、フランといると心が休まります。目と目が合うと、フランが何を言いたいのかが、なんとなく分かる様な気がします。本当に可愛いのです。フランが私のペットになってくれて、心から感謝しています。

しかし、こんなに可愛いペットを簡単に捨ててしまう人がいるのです。日本には棲まない爬虫類や、他の動物や環境に害を及ぼす動物や昆虫などを、平気で捨ててしまう人が多くなったという話は、皆さんも、聞いて久しいことだと思います。街中の公園の池に、ワ

ニが棲み着いているといったニュースや、捨てられたアラ
イグマが、数を増やして、民家の天井裏に棲みついて、
住人の生活に害を及ぼしたというニュースも、ずいぶん
昔のことだと聞いています。

私が今日、皆様にお話ししたいことは、犬や猫の殺
処分の問題です。平成二十七年年度の環境省のデータ
によれば、日本では、年間約十萬頭の犬や猫が殺処
分されているという事実があります。最初は可愛いと
思つてペットとして飼つていた犬や猫を、身勝手な理由
で手放し、その結果、殺処分されるといった実態で
す。手放す理由といたしたものも様々で、「實際飼つてみ
たが、世話ができないから。」「生まれてしまったけれ
ど、そんなにたくさんは飼えないから。」「引越す先で
は、ペットが飼えないから。」「最初は可愛いと思つた
が、可愛くなくなつたから。」「といったところが主な理
由ですが、人間の自己都合ばかりなのです。その自己
都合のために手放したペットが殺処分されて、命まで
奪われてしまうことに、私は強く理不尽さを感じ、憤
りを覚えざるを得ません。

次に、なぜ、強い理不尽さを感じるのかを、皆様に
お話ししたいと思ひます。皆さんは、パピーミル工場と
いうのを聞いたことがありますか。パピーミル工場は、

言い換えると、「子犬繁殖工場」であります。その一例を紹介しますと、親犬が、オス犬のスペース、メス犬のスペース、妊娠したメス犬のスペースに分かれ、それぞれ本当に狭いゲージに入れられて、子犬を産めるだけ産ませられるという場所です。生まれた子犬だけが、売るためのペットとして、外に流通していくのです。福井県のパピーミル工場に視察に入った動物愛護グループは、あまりに悲惨な光景に目を覆ったと、新聞紙上で報じられています。こうした子犬を生産的に産ませている事実と、先にお話しした、手放されたペットが十萬頭以上も殺処分されている事実を考え合わせる時、生命を尊重する観点から、私は、大きな矛盾を感じざるを得ません。私が強い理不尽さを感じるのは、こうしたところからなのです。

そうした状況の中でも、犬や猫の「里親制度」を行っている団体も複数あります。里親制度とは、手放された動物の引き取り手を募集して、新しい飼い主に引き渡す制度です。引き取り手が、引き取った犬や猫を手放すことがないよう、一週間から一か月ぐらいの幅で、トライアル期間、つまり、試しに自分のペットとして飼ってみる期間を設けることもあります。実は、私の愛犬のフランも、私の家で里親として引き取った

犬です。こんなかわいい犬が、殺処分の対象にならなかつただけでも、よかつたと思つています。こうした里親制度が、飼い主から手放された犬や猫の、大きな救いになつていくのです。しかし、そうはいつても、殺処分の対象となる十萬頭の犬や猫を、里親制度だけでは、到底、助けきれないのが現状なのです。

今日、お話ししたことで私が言いたかつたことは、生命尊重、命の大切さです。犬や猫の大切な命を、人間が好きに扱つていいものではない、ということ。現在の法律では、これまでお話ししたことは、全く問題ないのかもしれないが、物のように動物が生産され、要らなくなつたら物のように、命を全うすることなく、廃棄処分されてしまう今の現状に、どうしても納得できません。人間の命も、動物の命も同じものだと思います。どうか、ペットを愛好する方々、そして、ペットを提供する方々の、モラルの、さらなる向上を願つてやみません。